

審査委員会委員長賞 本当の平和へ



鹿児島県 鹿児島市立坂元中学校 2年 松元 一真

「この耳をふさいでも聞こえる声がある。この心閉ざしてもあふれる愛がある。」

僕たちは、修学旅行で長崎を訪れるため戦争について学びました。冒頭の歌詞は「折り鶴」という歌の一部です。僕は歌の練習をしながら、歌詞の意味をまだ分かっていませんでした。その意味を久保清子さんのお話を聴くことで初めて理解できたのかもしれない。

久保清子さん、現在79才。今では数少ない鹿児島在住の被爆体験者です。

1945年8月9日。よく晴れたその日、お昼ご飯を待ちながら、友達と外で遊んでいた清子さん。ピカッ。雷のような光が見えたかと思うと、ものすごい勢いの爆風が襲いかかり地面にたたきつけられました。スカートには火がつき、夢中で地面を転がり火を消すと防空壕に飛び込みます。その時に負ったやけどが、清子さんのおしりに跡となって今も残るそうです。

自宅で被爆した母親は全身に無数のガラスが突き刺さり、熱線を体中に浴びた弟は水が飲みたいと言いながら死んでいく。父親はやっとたどり着いたけれど、片足は皮一枚でかろうじてぶら下がり、片方の眼球は飛び出しています。

「こんなおばけ、お父さんじゃなか。」

と言って泣き叫ぶその頭を、いつものように優しくなでられて、やっと父親だとわかる清子さん。自分の父が衰弱し死んでいく姿を7才の子どもが目当たりしている、なんて残酷なことでしょう。

しかし、それだけではないのです。戦争は人の心を変えてしまいます。やっとの思いでたどり着いた親戚の家では、原爆病がうつると言われ、何も与えられず、しかたなく外に寝たそうです。体中蚊に刺されながら悔しくて悔しくてしかたがなかった、そう語ります。

けれども、清子さんはその親戚を恨んではいません。「たった一発の爆弾のせいで…。」清子さんが恨んでいるのは原子爆弾なのです。アメリカはなんて心ないことをしたんだ。

しかし、清子さんは思いがけないことを僕たちに伝えました。

「原爆を落としたアメリカの人は、何回も何回も十字を切って、ごめんなさいと泣きながらボタンを押したそうよ。だって、落とさないで自分が殺されてしまうけんね。」

そうなんだ。

落とす側も苦しかったんだ。ならば、なぜ苦しむだけの戦争なんかしたんだ。しかし、日本人は「された」だけではないことも僕は知った。どの国の人でも、戦って勝てば幸せになれる、そう信じた。

幸せになりたい。僕も同じ過ちをいつか犯すのではないだろうか……。

「この前ね、夢の中にお母さんが出てきて、清子、清子、と呼んでくれました。死んで70年以上経って初めて。うれしくてうれしくて朝まで泣き続けました。」

なんて切ないことでしょう。高齢の清子さんが、夜中にお母さんのことを思い、朝まで泣き続けているのです。その姿を思っ胸が苦しくなりました。

一発の原子爆弾で幸せを求めるのなら、それで得る幸せはきっと間違っている。僕たちは争わず幸せを求めなければならぬ。

「この耳をふさいでも聞こえる声がある。この心閉ざしてもあふれる愛がある。」

僕たちは、涙を流しながら訴えてくださった清子さんの思いを受け止めなければならない。そして、僕たちは本当の平和を作らなければならない。たくさんの「声」と「愛」を受け止めながら。